

漢墓に於ける副葬銅鏡と地域差に関する一考察（その2-1）

～洛陽焼溝漢墓及び広州漢墓の報告書より～

C060001 倉本 卿介

第二章 広州漢墓に関して～1

1、広州に関すること

広州市

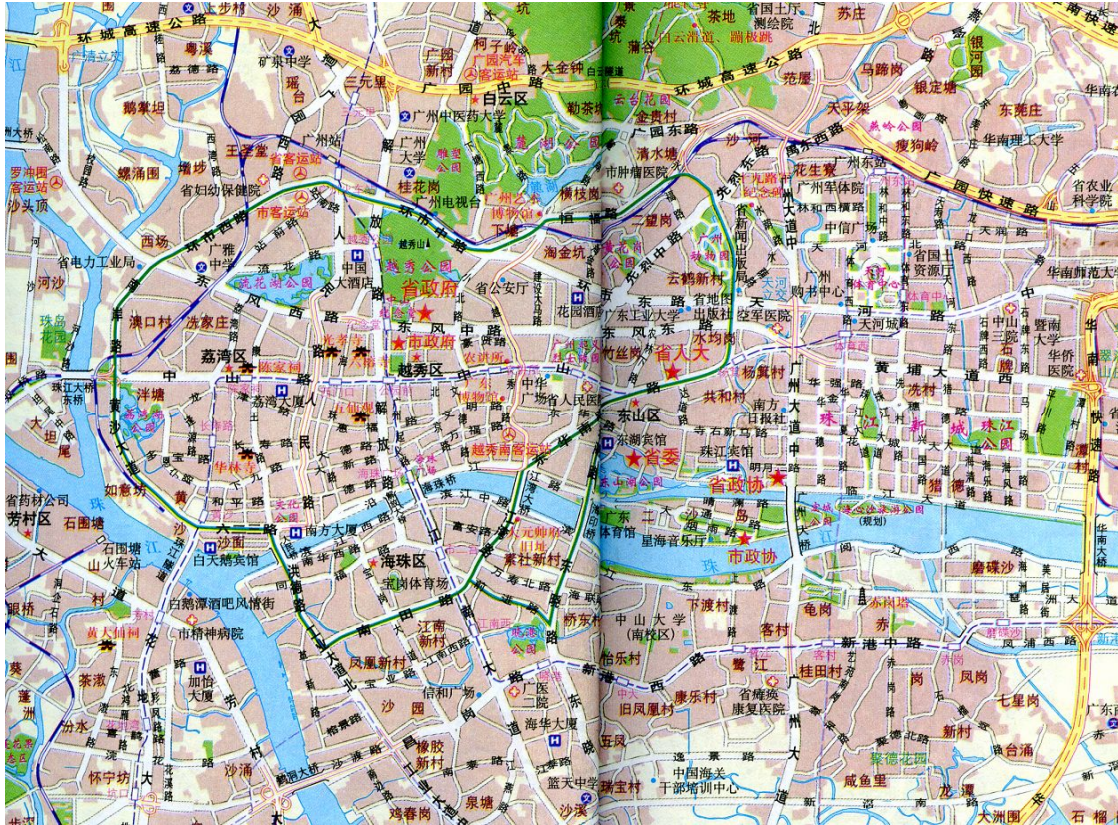


図29 広州市中心部

新世紀 広東省地図集より

広州市は広東省の省都である。略称は穗（すい）、別称は羊城。その名の由来は、宋の『寰宇記』に“昔 商固楚相と為りて、五仙人有り、五色羊に騎（の）りて、各々谷穂を一茎持ち、以つて州人に遣わす”とあり、これにより以後「羊城」・「五羊城」・「穗城」・「仙城」などの別称で呼ばれるようになった。広東省は中国の最南部、五嶺（南嶺とも言う）山脈の南に広がる地域である。北境に五嶺山脈が横たわっていて長江流域と珠江流域の分水界をなし、華中と華南の境界でもある。五嶺山脈は西北から順に、越城嶺、都龐（とほう）嶺、萌諸（ぼうしよ）嶺、騎田（きでん）嶺、大庾（だいぐ）嶺の五嶺から成るのでこの名がある。いずれも東北から南西へと平行にのびている。省の中央部を東西に北回帰線が走っている。高温多湿、台風の齎す雨で緑が豊か。省北部の山地が亜熱帯に属するほかは、多くの地区は熱帯気候である。珠江の主流である西江は隣接する、広西チワン族地区から東流して広東省

に入り、省都・広州市近くで五嶺山脈から南下する北江と合流する。また、省東部からは東江が西流して珠江に加わり、河口一帯に広大大珠江デルタを形成している [註 19]。

広州市はそのデルタの北縁にあり、京広（広州～北京間）、広九（広州～香港の九龍間）、広三（広州～広東省内三水間）の 3 鉄道が交差する [註 20]。その地理的位置は非常に重要であり、古くから中国に於ける対外貿易と交通往来の主要港であり、建国後もさらに南玄関としての役割は大きい。市には越秀、東山、海珠、荔（り）湾、天河、白雲、黄埔、芳村の各行政区と花県、従化、増城、番禺の各行政県がある [註 19]。町の北に越秀山（別称は観音山）があり、頂上には明代の建築物（鎮海樓）と五羊石像（五仙人が天に昇って行った後、地上に残された羊は化して石になったと言われている）が立っており、鎮海樓に登れば、広州の町は余すところ無く目に収められる [註 8]。新石器時代にはすでに人類が、この地で漁獵並びに農業生産活動に従事していた。一帯は古くは百粵、揚越、陸梁などと呼ばれ、粵（人）族の居住地だった。粵（越）の字はもともと「狭く、奥まった南方のじめじめした地」の意味合いを持つと言う [註 19]。広州は 2800 年余りの歴史をもつ古い町である。周の夷王の時（紀元前 862 年）に楚国が「楚庭郢を番禺」に建てたという。これが広州（今の名）の城づくりの初めであった。紀元前 671 年に楚庭が「五羊城」に拡大された。広州城は「閩南武城」・「越南武城」・「秦番禺城（任囂城）」・「越王城（趙佗城）」・「後漢番禺城」・「明老城」・「新城」及び「清城」などの発展段階を経て、その範囲は 5 次に亘って著しく拡大された。 [註 8]・図 30。



図 30 広州の都址の変遷 中国の諸都市より

『史記』「始皇帝本紀」によると、その三十三年（紀元前 214 年）“南方陸梁の地取り、桂林・象郡・南海郡の三郡を置いて、罪人をやって守らせた”とある[註 16]。そして任囂を南海郡尉とし、番禺にて郡を治めさせた。秦の二世の時、秦末の混乱期に乗り南海尉の趙佗は任囂を継ぎ南海郡を支配し、南越国を建てて自ら南越武王（後に南越武帝）と称し（紀元前 204 年）、元の「任囂城」を周囲 10 里（5 km）の大きい城へと拡大し、「越王城」（所謂、趙佗城とも言う）と称し、都を番禺（今の広州）に置いた。[註 8]

南越国は、北境の五嶺山脈を障壁として、時には漢王朝に服従し、時には対等な国家として独立していたが、漢の武帝により武帝元鼎六年（紀元前 111 年）に平定される。[註 19]

前漢は、南越国の旧知に南海、蒼梧、合浦など九郡をおいて統治した。南海郡の治所は番禺である。『漢書』「地理誌」によると、「南海郡 秦置く。秦敗れ、尉佗この地に王たり。武帝元鼎六年開く。交州に属す。戸数 19,613 人口 94,253 圍羞官あり。県 6 番禺尉佗の都。塩官あり。[広東・番禺]とある[註 26]。後漢は交趾刺史部を改めて交州とした。三国時期は呉の領域となり大帝権（孫権）の黄武五年（226 年）“交州を分け、広州を置く”と『三国志』「呉書・呉主伝」は記している[註 2]。この時から「広州」の名称が初めて使われ始めた。越には二度の比較的大きな民族移動が見られた。秦・漢時の遠征に伴う 50 万余の漢民兵士と民間人の南下と、もう一度は西晋末の混乱に伴うものであると伝えられる[註 19]。西晋時期広州に十郡置かれ、その統治地は南海郡番禺であった。東晋・十六国時期は、東晋の領域で八州の内珠江流域を広州とし、劉宋・魏時期は劉宋の領域、南齊・魏時期は南齊の領域に、梁・西魏・東魏時期は梁の領域に、陳・北齊・北周時期は陳の域に、隋代は南海郡、唐代 1 時期は貞観元年（627 年）十道に分けた内の嶺南に当り、唐代 2 時期、開元二十一年（733 年）十五道に分けた内、広州は嶺南道 72 州の治所となり、唐代 3 時期は唐最盛期で、広州に嶺南節（度使）が置かれ、唐代 4 時期は、元和十五年（820 年）頃、広州には嶺南節度使が置かれ 21 州の治所であった。五代十国時期 917 年には、劉龔が高祖と称し東西嶺南地域を「南漢」と言う国号とし、広州に興王府を置き都とし、再び町の規模を拡大させた。960 年趙匡胤太宗は北宋を建国、その 971 年「南漢」を征服し、南漢領域を含め、広南東路地域としその治所を広州に置いた。金・南宋時期（12世紀初頭～13世紀後半）、広州は北宋時と変わらないが海洋貿易が盛んになり、貿易港として繁栄した。1279 年元軍は南宋を滅ぼし、広州は江西行省・広州路とされた。明時期、広州に広東行省を置き、後広東省と言う地方名称になった。清時期は、広東省・広州府とされた[註 28]。城に関しては、北宋の歴 4 年（1044 年）に子城が修復され、北宋の熙寧 3 年（1070 年）に古越城の東の土台に東城が築かれ、西は子城と連なった。そして熙寧 4 年（1071 年）に西城も築かれて周囲 13 里（6,5 km）余りとなった。なお南宋の開慶元年（1259 年）に城南に東西雁翅を増築し海辺まで伸びていた。明の時代に広州城は南北へ拡張された。明の洪武 10 年（1377 年）前後に宋代の東、中、西の三城にまとめ、これを「老城」または「旧城」と呼んだ。城の周囲は 21 里（10,5 km）であった。さらに嘉靖 44 年より 45 年（1565～1566 年）

まで間に、城南に外城が増築された。周囲6里（3km）余りで、「新城」と呼ばれたのである市街地の範囲も城外の東、西両関まで開発されたが、清代にこの両関で商業が繁盛し、沢山の民家が作られた。それは今日の宝華路、逢源路などの一帯であった。

広州の城壁は、民国7年（1918年）に広州に市政公所が設立されてから道路に改築され、1922年にその全部が取り壊された[註8]。図29 1930年1月特別市、8月広東省轄市に。

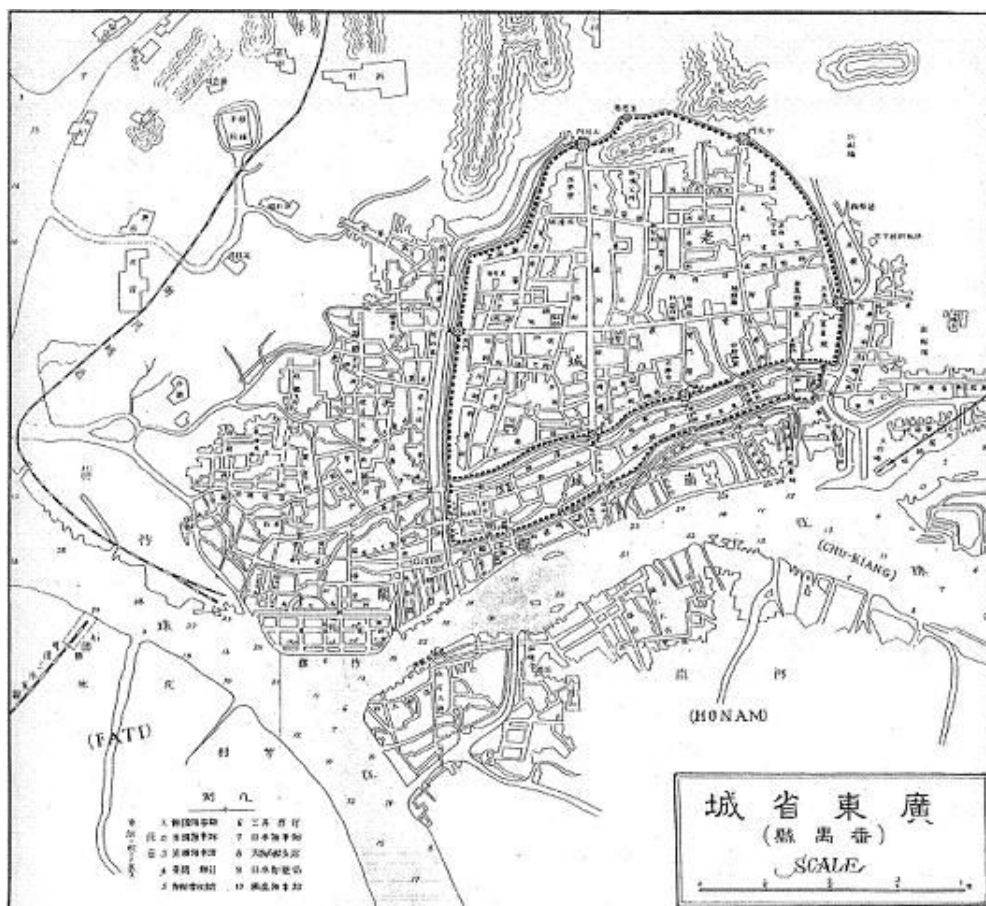


図31 清代の広東省城 中国省別全誌 広東省より

出典・参考文献

| | | | | | |
|-------|-------------------|----------|--------------|----------|------|
| [註2] | 広州漢墓 | 報告書 | 中国社会科学院考古研究所 | 文物出版社 | 1981 |
| [註8] | 中国の諸都市—その生い立ちと現状— | 陳橋驛編 | 訳馬安東 | 大明堂 | 1990 |
| [註16] | 史記 | | 世界文学大系 | 筑摩書房 | 1962 |
| [註19] | 中国省別ガイド 広東省 | 辻 康吾ほか | | 弘文社 | 1992 |
| [註20] | 中国地名辞典 | 編・訳 塩 英哲 | | 凌雲出版 | 1983 |
| [註26] | 漢書・地理志 | 小竹 武夫 | | 筑摩書房 | 1980 |
| [註27] | 簡明中国歴史地図集 | 中国社会科学院 | | 中国地図出版社 | 1996 |
| [註28] | 新世紀 広東省地図集 | 広東省地図出版社 | | 広東省地図出版社 | 2004 |
| [註29] | 中国省別全誌 第一巻広東省 | 東亜同文会著作 | | 東亜同文会発行 | 1917 |